

見た農業

特集



座談会風景
その1

女性がつくる 新しい農村と農業

男女雇用均等法が施行され、企業の職場における女性の進出や、それに伴う女性の新たなストレスなどについての記事が新聞を賑わせている。

家族労働にたよる農業においては、従来から女性の役割が強調されてきた。しかし、農業経営や村づくりに女性の意見は十分反映されているのだろうか。そして、女性は今の農業や農村の生活をどう見ているのだろうか。

この特集では、女性から見た農業・農村の現状と女性のえがく新しい農村と農業について、農村からお二人、都市側から三人の女性をお招きし話し合っていた。 (編集部)

酪農は天職、毎日の仕事

楽しくてなりません

——まず、討論の前に簡単な自己紹介から入りたいと思います。それでは野幌の農協婦人部の粟井さんからお話しします。

粟井 野幌で畑作を営んでいる粟井です。現在は妻が主体で面積は一四haほど。家族は主人と子供二人の四人暮らしです。私はもともと埼玉県の出身で、保育専門学校

を卒業したのですが、そのままぐに就職するのが嫌で、江別の町村農場で酪農実習に参加しました。そこで主人と知り合って結婚し、農業を生業とするようになったんです。最初は野菜専業でしたが、思うような経営ができなかったので、畑作に切替えました。野幌は地理的に札幌に近いせいか、女性

女性から

座談会

出席者

江別市 農業・主婦
粟井文子

猿払村 酪農・主婦
円丁康子

北星短大生活経済研究室
研究員
赤城由紀

市民生協コープさっぽろ
副会長

田端弘子

(株)道新オンテナ編集部
松井歩

司会 幸健一郎
(地域農研 研究部長)

編集協力・写真提供＝
株ワークボックス

座談会風景
その2



の意識も進んでいて婦人部活動も活発なほうだと思います。

——粟井さんは農協のフレッシュミセスというコンクールで、北海道の優秀賞を取られた経験があります。次に猿払で酪農をなさっている円丁さん、お願いします。

円丁 私は四国の愛媛出身なのですが、緑の草地で牛とのんびり暮らせたなら……、という夢を抱いて、帯広畜産大学に入りました。そこで同じように酪農を希望している主人と意気投合して一緒になり、二十四歳のときに農業開発公社の幹旋で猿払村に入植が決まったんです。牛は七十頭、草地は山も入れば六Onaほどです。家族は主人とふたりの子供、今の仕事は天職だと思っていますし、毎日が楽しくてなりません。

——それでは都会の三人の方、農業との関わりを含めて自己紹介をお願いします。

田端 生活協同組合コープさっぽろの非常勤の理事を務めている田端です。私は帯広の出身で、北大を卒業した後、高校の講師をしておりましたが、出産を機会に育児

に専念。子供たちの手が離れる頃、ちょうど市民生協が組合の代表を募集していて、そのとき以来二十六年間、コープさっぽろの活動を続けてきました。私たちの組合員は七十万人ほど、その九九%が主婦ですから市民運動というより婦人運動だという感を強く持っています。

——生協の活動は「食」の問題に強い関心を持たれているようですね。
田端 はい。特に農産物の自由化問題がきっかけとなって、農業は生産者だけの問題と遠ざけて考えられなくなりました。組合員の方の考え方は「食物は近くで作って近くで消費するのが一番だ」ということです。遠距離を輸送すると農薬や添加物が必要になりますから。また日本のような農法は環境の保全に役立つということで、その観点からも食料は自給すべきだと考えます。

赤城 私は北星短大で、生活経済研究員をしています。以前は広告代理店のコピーライターとして、市町村関係の広報誌やパンフレットを制作していたので、道内の農

村部に取材する機会が多くありま
した。その仕事を辞めて研究室に
入ったのが四年前。食をとりまく
多くの問題について、真剣に考え、
学生なり企業の方たちにとつ伝え
ていくか、その架け橋をしていき
たいと思っています。また、私は静
内の山奥で五歳まで育ちましたの
で、原体験として、取れたての物
を食べた美味しさ、馬や牛と暮らし
楽しさは忘れることができません。

松井 道新が女性のために発行し
ているフリーペーパー、「オントナ

の編集をしている松井です。私は
札幌生まれの札幌育ち。大学を卒
業したあと、新聞社に勤め、家庭欄
を担当したときに、食の問題と深
く関わりを持ちました。ちょうど
有機農法や無農薬野菜が話題にな
っていた頃で、農家に取材に行っ
て農作物がどのように作られ、ど
んな流通経路をたどって私たちの
もとに届くのかを勉強しました。そ
の後、東京転勤などを経験して今
のオントナの編集部に入りました。

農業の経営について、夫婦で 話し合う機会をもっと多く…

—皆さん、それぞれの形で農業
とかわりをもつてらっしゃるよ
うですね。それではまず農村の女
性の地位や役割について話合っ
ていきたいと思えます。地位や意識
がどう変化しているか、現状を話
していただけますか？

粟井 地域によって差があるよう
ですが、江別の農家の若い女性を
見ていると、畑仕事を嫌う方が増

えています。全く子育てに専念し
て、農繁期に夫が夜遅くまで働い
ていても、手伝おうとしません。
また、お姑さんもそれを黙認して
います。花嫁不足の農村に来てく
れたのだから、大切に扱わなくて
はということなのでしょうが？
一方、全道大会で遠隔地の方にお
話しを聞きますとお姑さんの方にお
が封建的で、婦人部活動のために

家を開けても「また遊びに行くの
かい？」という目で見られてしま
うそうです。女は外に出るべきで
はないという古い体質がそのまま
残っているようです。

—粟井さんご自身は、婦人部活
緑の草地で牛とのんびり暮せたら



動を活発になさってますよね。
粟井 はい。野幌農協の婦人部は
私と同年代の方が多く、考え方も
似ているので楽しくやっています。
忙しい仕事の合間に、女性だけで
集まって、お酒やお菓子を持ち寄



粟井さん

っているいろいろな悩みを話したりしてお喋りしたりしてストレス解消しています。仕事をするうえでのはりあいにもなっていますね。

——野幌は札幌に近いので、考え方が都会的なのかもしれませんね。猿払の田丁さんはいかがですか？

田丁 私は今年、婦人部の会長になったのですが、集まりも悪いし、やりづらい部分があります。皆さん、家に縛られていることに強い不満は持っているのですが、解決しようという積極さも見受けられません。しかし、酪農という仕事の特異性が女性を家に閉じ込めている、という面もあると思います。朝と夜の搾乳は必ず行わなければなりませんし、家を留守にできる時間は限られていますから。

結局、他の酪農家のやり方を見る機会がないので、夫に言いつけられるままに仕事をこなしていくしかないんです。考える余地を与えられていないし、夫やお姑さんと話し合うことも少ないのが現状です。

田端 都会の主婦から見ると、農村のご夫婦は同じ仕事を協力しあ

ってなさっているわけですから、会話も多く、よい夫婦関係が作れているんだろうな、と映っていました。が、一概にそうとは言えないようです。

田丁 残念ながら少ないと思いますが、と、言うのは余所（よそ）に視察に行ったり、会議に出たりと情報を得る機会を与えられるのは

チャンスさえ与えられれば

女性特有の判断力が生きてくる

田端 確かに、男性の分析力や判断力は女性より優れている部分はあるけれど、女性特有の判断力が必要な場合もあると思いますよ。

例えば生協の組合活動の中でこんなことがあったんです。食品の着色料について研究していたグループがウインナーを作っている工場に見学に行ったとき、工場長から「ウインナーは赤くなければ商品ではない。それを言うなら、あなたたちの口紅の色素はどうなのか？」と言われたんです。そのとき「赤くなければ商品ではないと

いつも男性で、女性は留守番しているわけですから。何回かに一回くらいは女性も外へ出て情報を掴む機会があればいいなと思います。しかし、いざとなると女性は決断ができずに結局は家に閉じ籠もってしまうのが現実です。夫にまかせきりの女性が多いのではないのでしょうか？

おっしゃいますが、それが商品かどうかは消費者が決めることではないでしょうか？」と発言した人がいました。

そういった鋭い判断力は女性ならではのものです。チャンスさえ与えられれば女性の力が役立つ面もあるのではないのでしょうか？

栗井 まず、そういった意識を育てる土壌をつくる必要があります。農村の中ではまた女性が経営について口出しすることをタブー視する空気がありますから。男性の側も、経営について女性に反論



円丁さん

されたりすることを嫌う傾向が強
いようですし……。

田端 今、新規就農者の方が増え
ていらっしやるとか。円丁さんは
ご夫婦とも大学を卒業して猿払に
入植なさったそうですが、脱サラ
で農業に転職する方もいらっしや
るそうですね。そういった新しい
血が、地域に大きな影響を与える
のではありませんか？

円丁 脱サラで入ってくる方も増
えていますし、確かに新しい考え
方をする女性もいますが、大きな影
響力を持つほどにはなっていま



牛舎での親子の会話は楽しい、子供も一家を支える労働力。

せん。もとからいる人たちはヨソ
はヨソと割り切った考え方をしま
すから。

粟井 私の主人は厚別出身で、野
幌に来てからかれこれ十四年たち
ますが、いまだに「よその」と
しか見られませんが。私たちが新し
いやり方を取り入れて成功しても
「あそこは親が金持ちだから」と
言われるだけで、自分で新しい方
法を試みてみようという意識は生
まれてこないようです。

赤城 農村の意識が立ち遅れてい
るというお話しができましたけれ
ど、それは農村に限ったことでは
ないと思います。都会でも年配の
方の中には視野の狭い方が大勢
いるし、若い女性を見ても「私は
お茶くみだけしていればいい」と
いう受動的な人生観をもった人も
多いんです。ただ、都会の人は都
会しか知らない、農家の人は農家

しか知らないという今の現状は見
直していくべきではないでしょ
うか？ テレビや新聞を通してお互
いのことを知っているようで、実
は知らない。私たちも今日よう
に農家の方と実際にお会いして、
お話しする機会はほとんどありま
せん。もっと交流をして、生の情
報を交換していくことが必要だと
感じました。

松井 農村だけが立ち遅れている
のではないという赤城さんのご指
摘には同感です。都会の女性の中
にも自分の仕事について、深く考
えていない方が多いですから。そ
れに花嫁不足の問題にしても、農
村の問題としてクローズアップさ
れています。都会の男性も結婚
相手を探すのはたいへんな時代な
んです。つまり農村で言えること
は札幌でも言えることなのではな
いでしょいか？

都会と農村の婦人が互いに 生の情報を交換する機会を

——今までのお話しから、農村部

の女性が有利だと思えるのは積極



赤城さん

的に勉強しようと思えば旦那さんと対等の立場で仕事をする事ができるし、経営に参加する事ができるということですね。しかしそのためには、さまざまな問題が残されているのも事実でこのあたりを解決していけば、農村も女性にとって魅力のある働き場所となりそうですね。

円丁 そのとおりですよ。広い土地に囲まれていますから、都会では不可能なことが田舎では簡単にできる。たとえば、子供たちにプランコをつくってあげたり、畑をつくったりと、楽しみはいくらでも見つかります。にもかかわらず、都会を羨んで、自らの人生を楽しくしようという意識を持たない。また自分の職業に自信を持ってない女性が多いようです。

田端 先程、赤城さんがおっしゃっていたように、都会と農村の女性がコミュニケーションして、お互いに話し合ってみたらどうかしら？ 都会生活はここが魅力だけど、こんな不便があるとか、農家の暮らしはこんなところが楽しいとか……。

円丁 ええ、農村のいいところを皆さんに知って欲しい、という気持ちは強いですね。私は札幌で会社勤めをした経験がありますからよけいに農村の魅力を実感できるんです。

田端 都会は子供たちの遊ぶ場所が少ないし自然とふれあう機会も少ないでしょう？ そこでコープさっぽろでは「ふれあいの森」という宿泊施設を積丹町につくることになったんです。家族ぐるみで自然と親しめる場所になると思いますし、積丹の農協の方と産直の話もまったり、都会の家族と農家の方との交流ができるものと期待しています。

農業を通じて得られる教育効果 それは生き方の根本を教えてくれる

次に、農村の教育問題に話題を変えたいと思います。都会では受験戦争の弊害が云々(うんぬん)されていますが、農村でも進学問題は悩みの種となっているようです。



都市と農村の交流

赤城 私は農村の子供たちは恵まれた自然の中で伸び伸びと育っているものと思っていたのですが、最近は都会の塾に通う農村の子供が増えていくとか。そういうえば、夜の十一時頃、JRに乗ると塾帰



田端さん

りと思われる小中学生の集団を見かけます。親はきつと、この情報化社会、国際化社会のなかで子供が取り残されてしまうのではないかとという危機感から都会の塾に通わせるのでしょ。

—— 都会の情報が悪い方に働いてしまっているわけですね。

赤城 ええ。そうなると農村の子供たちは都会志向になって、自然の中にながらテレビゲームで遊ぶようになってしまふ。人間が家畜化されて、種としての弱さがどんどん広がっていくような危機感を感じてしまいます。

粟井 たしかに農村では不安感から、子供を塾に通わせているケースが多いですね。また別の問題もあります。私の子供が通っている小学校は全校児童が三十人に満たないような小規模校で、そんな中で六年間過ごした後、いきなり人数の多い中学校に入ると、うまく対応できなくて悪い方に染まってしまう子供も多くなるようです。

赤城 伸び伸び育った農村の子供たちが、急に競争社会の中に放りこまれて、劣等感を持ってしまふ

のは可愛そうですね。知識詰め込み型の教育をされてきた子供より、農村の子供のほうが底力は強いと思いますが、純粹なだけに悪い方に響くと怖いと思います。

粟井 話はちょっとずれますが、最近農村では、子供に農作業を手伝わせるのを嫌う傾向があるんです。私は農家の子供が仕事を手伝うのは当たり前なことだと思いませんが、まわりが許してくれません。「小さな子供を使って可愛そうに。手がたらないんだったら、誰かに頼めばいいでしょう」と言われてしまいます。昔は、そんなことなかったんですけど……。

円丁 子供に農家の仕事を手伝わせるのは、けつして悪いことではないはずですが。私も家の中では子供たちに「勉強しなさい」と小言ばかり言っていますが、牛舎での親子の会話はもっと夢があつて楽しいものになります。また子供も、一家を支える労働力として家計を支えるということとは素晴らしいことなのではないでしょうか？

粟井 ええ。子供に手伝いをさせないと、「親が子供を養うのは当

たり前」という意識しか持たないようになってしまいますよ。

田端 残念なお話ですね。農業の中で育まれる教育、というのは受験勉強では学ぶことのできないものがあると思います。人間としてどう生きるか、という根この部分を教えてくれるものなのではないでしょうか？ それなのにそれを切り離して、都会の子供のように学習塾と参考書とテレビゲームに囲まれた生活をするなんて……。ある人から聞いた話なんです。が、都会の子供たちは受験の技術がうまう、受験受験で頭が一杯になってしまっているが、農村出身の子供は一年位浪人しても大学に入ってくると頭にいろいろなものを詰め込まれていないから、どんどん伸びていくといっていました。こんなところに農村の親ごさんは自信を持って、子供の教育を考えて欲しいものですね。

松井 農作業を子供にさせない親が増えているということですが、それは都会でも同じではないでしょうか？ 商売をしている友人に話を聞いても、子供には手伝わ

ないという人が増えていきます。私
が問題だと思うのは、自分の子供
に農家を継がせたくはないとい
方の多いこと。理由は「苦勞する
のは目に見えているから」とおっ
しつる方がほとんどです。時代の

うきめにさらされ、自分たちの力
ではどうしようもない苦しさの中
にいる農家の方たち。私たちはそ
の部分を考えていかなければと思
います。

生産者の側から消費者へ メッセージを発信してほしい

——今農業が抱える大きな問題と
して、農村の老齢化が挙げられま
す。例えば平成三年度、新卒で農
業に就いた者は道内で三百人しか
いません。北海道は二百二十市町
村ありますから、一市町村に一・
五人という悲惨な状況なのです。
この状態が続けば農村の老齢化は
どんどん進んでいくでしょうから、
もっと農村の生活の素晴らしさを
見直していく必要があります。評
論家の向井承子さんという方が
「農村は生き方の宝石箱」と書い
ておられました。その部分をア
ピールしてはどうでしょうか？

自分たちで宝石を探さないとい
うのは、無理があると思うん
です。
日本の農業の展望がはつきり見
えてこない限り、自分の息子にも
「おまえ、継いでくれ」とは言え
ないはずですからね。必要なのは、
国民的な合意で支えられた、農業
の将来展望ではないでしょうか？
今、ガット、ウルグアイラウンドで
米を始めとする農産物の自由化が
叫ばれており、農業はますます厳
しい状態に立たされていますか
ら。
——おっしゃるとおり、国民的な
合意を得て農業政策をたてていく
ことが、日本の農業を良くしてい



馬鈴薯の収穫

くことに繋がることでしょう。
田端 今、消費者の要望ばかりが
目立っている状況だと思います。
それも「安全で、おいしくて、安
くて」というエゴイズムを押しつ
けています。しかし農村の側から
の発信は、よほど耳をすまざなけ
れば聞こえない。たとえば私たち
は産直で、北見から無農薬たまね
ぎを共同購入していますが、箱を
開けると、どんな農法で、幾代か
かって土をつくって、というメッ
セージがかかれた手紙が入ってい



松井さん

ます。生産者の方からこんな発信があれば、お互いに理解も深まると思うし、お互いの要望をぶつけ

あうきつけになるのではないでしょうが。

規格外の農産物を捨ててしまう 悲劇、味はかわらないのに……

田端 最近ですが、長崎のある農協と、コープさっぽろの間でこんなお話しがまとまったんですよ。

わたしたちがみかんの共同購入をする際、調査団を長崎に派遣して先方の農協の婦人と話しあったときに、「小さなみかんは市場で値段がつかない。味は同じなので、なんとかならないものか」という相談を受けたそうなんです。大き

さはピンポン玉よりやや大きいくらいのものなんです。ではサイズ〇〇型をやってみようということになりこれが好評を博しました。やはり遠くても、足を運びあうことがたいせつだな、とそのときに感じたいです。

円丁 今のお話しは農村側からすると、とてもありがたいことです。規格外の農産物を店に置いてもら

えないのは、大きな悩みの種で、味は変わらないのに捨ててしまうこともあるんですよ。また、土がついていたり、虫が喰っているものを置いてもらえないのも残念ですね。町の人はアメニティを追い過ぎて野菜の本来の形、状態がわからなくなっているのではないのでしょうか？

赤城 農産物が工業製品と同じように扱われた悲劇なのでしょうね。規格外は輸送が楽で運搬料金が安くあがるということなども関係しているのかもしれない。あくまで自然を相手にして人間がつくったものだということが、なおざりにされている感があります。

また、工業製品を真似てブランド化する動きのあることも不安を覚えます。例えば夕張メロンばか

りが脚光を浴びて、その他の地域のメロンが影に隠れてしまいました。消費者はブランドに誘惑されやすいので、変なブランド信仰はつくらないほうがいいのではないのでしょうか？

栗井 規格外のお話しができましたが、たしかに一箱の規格外を作るのに、その三〜四倍の作物を捨てなければならぬという悲劇があります。見栄えが優先してしまうんです。ですから消費者の方には何が美味しいのか、もっと研究してもらいたいな、と思います。

赤城 今はパック売りの野菜が多いので、都会の人間は素材を選べる目をもった人が少なくなってきました。料理教室の先生でさえ素材選びは意外と苦手なのでないでしょうか？ ですから農村部のご婦人で、本当においしい物を知っている方が素材選びのスキルを開校してくださることを望みます。

農村の女性が、都会の女性に対して、消費者を教育するのだ、という積極性を持つことは双方にとってプラスになると思います。



司会 幸 健一郎

近くで作って近くで消費、自給できないのに他国から買うべきではない

円丁 今、欧米では農村滞在型のホームステイがブームだと聞きました。私たちもぜひ都会の皆さんに農村に来ていただきたいと思えます。話したいことはいっぱいあるし、町から新しい空気を運んできてくれたら、それも刺激になって楽しい。そして、お互いの意見を交換しあえたら、新しいことが生まれるのではないのでしょうか？

ごく一般の主婦同士がつながりあることがたいせつだと思います。

田端 私が訴えたいことは二つあります。ひとつは、見栄えのいい農産物に慣れてしまった私たちが、自然のままの美味しいものを選ぶ感覚を身につけるには時間がかかるといふこと。ある日、組合員がりんごの生産者の方から、りんごは袋をかけない方がおいしいという説明をうけたんです。ただし無袋りんごは見栄えは悪いですね。

その日、お土産として真っ赤な有

袋りんごを、無袋りんごを選んでもらったら、全員が見栄えのいい有袋りんごを持って帰ったという笑い話がありました。一度くらい耳から情報を得たくらいでは駄目なんです。ですから生産者の方も繰り返し、繰り返し発信してほしいですね。それも女性同士が発信しあうことが大切だと思います。

——なるほど。一度や二度ではなく、根気よく情報を発信しあうのでなければ、成果も期待できないというわけですね。

田端 はい。もうひとつは穀物全体で七割も国際市場に門戸を開いている日本の食料自給率をもっとみんなに知ってほしい。米くらい自由化してもいいという意見も多いようですが、米だって五万トンの既に入っているんです。一〇〇%自給できるものをなぜ減反してよその国から買わなければ

いけないのか、みんなで勉強していかなければいけないと思います。最初に申しあげたように、食べるものは身近でつくることがお互いの仁義です。自分のところをつくらないでよそから買ってくることはすべきではない、という基本姿勢に立つべきです。

——おっしゃるとおり、農家はたいへんな問題を抱えているわけですが、田端さんのおっしゃるように消費者の方に理解してもらわなければ解決できない問題ですし、反対に国民的なコンセンサスが得られればおのずから解決できることだと思えます。我われがもっと自信を持たなければならぬのは、日本には一億二千万という高所得をもった消費者がいるということです。ここに食料を提供するので、そこから、どんなにつくっても余ることはないのです。しかし、それにはお互いの理解が絶対条件となります。

今日はお忙しいなか、お集まりいただき、たいへん意義深いお話しをきかせていただきありがとうございます。



順不同

栗井 文字

今回の座談会をおえて、まず思ったことは、農村であろうと都市であろうと所詮、人間としての魅力が、今は問われる時代なのだという事です。適齢期の男性の婚期が遅れているという事では、特に農村部が問題視されがちであるが、農家自身が農業に見切りをつけようとするような現実の中、今、自分自身が置かれている現実にしつかりと目を向けている人がどれだけいるのでしょうか。個人の力では、確かにどうにもならない事も数多くあるのはわかりますが、行動をおこす前に、もうすでに諦めてしまふような、そんな人間が増えてきている現状を、まずどうにかしなければ話は先に進まないと思うのです。農村部の人も都市部の人も、もっと自分がしなければならぬことに目覚め、自分が今して

いることに疑問を抱き、そのうえで自分自身の行動に、自信を持つことが必要だと思います。今が良ければ、後先のご事は、どうでも良いというのでは、進歩などなくなってしまうです。

都市部、農村部互いに今は、日本農業を守るため、力を合わせる時期なのです。今の状態が長く続くようでは、日本の国の中から、農業は消滅してしまうでしょうから、女性でなければ、判らないこと、女性ならではの発想で、この大事な時期を乗り越えるのが一番だと思えます。古い因襲や人間関係などに、いつまでも縛られずに、今の泥沼のような状態の中から這い出す為に、糸口を見つけるためには、より大きな力が必要だと思います。細い糸の一本一本を寄り集め一本の太い糸にするために、女性同志がもっと、お互いに歩み寄って理解を深め合いましょ。世界中の、どの国にとっても農業が消滅して良いなどということはあるはずがないのです。眠れる獅子を起こし、明るい農業への道標をつけるために、これからも頑張っ て行きたいと思いますが、皆さんは、どう思われますか？ まずは、

自分自身の可能性に懸けてひとつひとつ問題を解決して行きましょ。そうすれば、自ずと道は開けてくると思うのです。

円丁 康子

農家が大変だと言われるのは、仕事がキツイ、キタナイ、クライといった外見しか見えていないからなのではないでしょうか。中味は地味でささやかではあるけれど、とても人間として豊かな暮らしがあるのです。でもそれは内側であるがゆえに伝えにくく、農家の人でさえ忘れがちです。

私は高校一年生の時、生まれて初めて農家に実習に入りました。酪農の仕事に触れるのが目的だったのですが、強烈な印象を受けたのは仕事ではなく、家族の人達でした。おじさんやおばさんの顔は、今までに見た事がないくらいツヤツヤ、ピカピカしており、大きな笑い声が絶えず、子供達はとても人なつっこいのです。「これは何かある」と、とても農家にひかれました。

仕事は確かにキツイけれど、終わった後は爽快感があり、やっただけ形として残ります。牛舎仕事は

確かにキタナイけれど、トラクタ―やトラックで広い草道を走ったり、広い庭の好きな所に花を植えたり、子供と牛を追う事も仕事なのです。クライと思われるのは、たぶん真剣に働いている時の顔つきからくるものなのかもしれません。太陽の下で力一杯する仕事は暗いわけありません。仕事の合間には自動車で行きたい所へ行けます。3Kというのは半分は当たっているとしても、それを相殺する以上の良さもこれまたあるのです。

農家の仕事を体験するとか、見学するとかだけでは本当の農家の良さを理解するのは難しいと思います。農家に入って初めて、肌で感じる事がたくさんあるのではないのでしょうか。仕事だけでなく、四季折々の野山の恵みや、作物・牛等を育てるといふ喜び等々、地味ではあるかもしれないけれど、幅広い農家の暮しぶりを更に踏み込んだところまで、非農家の人達にも知って欲しいものです。

と同時に、農家側もないものねだりばかりでなく、自然の中で生きる不便さと表裏一体の農業の良さを誇れるように、自分達の暮し

を見つめ直して欲しいと思います。文明の不便さの中で生きていく都会の人達を見つめることによつて。

そういう意味で、組織同志の交流ではなく個人同志の深い交流ができればと、僻地で出無精な私は考えています。

田端 弘子

真摯に農業に取り組む生産者の方々と、女性の視点で率直な話し合いができる機会を得て、ほんとうに幸いでした。今後も、息の長い交流をさせていただきたいと思いました。「農業」、特に「北海道農業」を「自分の問題」として、生産と消費の両面から話せる下地づくりが可能なんだ、という実感を得られたことで、今後の方向が見えてきた感じでした。しかも、「女性の視点で農業をみる」ことは、生産と消費の「環」を作る意味で有用な方向だと思いました。そこには、「売り手と買い手」の関係から生じる「サービスマスと要望」の域を越えて、生活が語りあえ共感し合える関係ができるからだと思います。

コープサッぽろでは産直に対す

る会員の支持が高く、アンケートによる会員の期待は、①安全性(安心)、②味(品質)、③価格の順です。産直なら、どこで、だれが、どんな作り方(農法)をしたのかが分かる。つまり、氏素性が確かなことが「安心」を求める消費者(主婦)意識に合致するのだと思います。特に最近、他県に比べて環境汚染度の低い道内農業に期待が強く、加えて「有機農法」への関心が急速に高まっています。

低農薬すいか、有機米など減農薬、有機栽培に取り組む生産者との産直についてのアンケートに示された高い支持率が、会員意識を裏付けています。

全国でも、京都生協の「クリーン農業」、コープこうべの「フリードプラン」、宮城生協の「共同声明」などの産直の前提基準の設定があります。コープサッぽろでも、生活研究所に「農法問題研究委員会」が設置され、当面のテーマを産直問題と農業に置き、理事会への答申に向けて作業中です。農業研究者や、生産者からの情報・研究の交換をベースに、生産者と消費者を結ぶ絆になる「表示」に結

びつけないと考えているところですよ。

生協の役割は、農業と正面から向き合う真摯で先進的な生産者との産直を拡大・定着させ、道内により多くの先進的な生産団地をつくるパートナーの機能にあると思います。

その機能を有効にするためにも、ぜひ、女性同志の交流を深めたいものだと思えました。

赤城 由紀

人づくり(教育)も農作物づくりも「規格化」に終始するようになってからどうもおかしくなってきたように思います。教育も農業も本来の持味を無視したブランド化が進んでいます。でも、それはいったい誰の為になっているのだろうかと考え込んでしまいます。

農産物の廃棄率が商品化率を上回るような現実はどうしておこなうのでしょうか。これは消費者と生産者の間に立つて通訳や翻訳をしている人たち、例えば流通関係者やマスコミあるいは教育諸機関がきちんとその役目を果たしていないからではないでしょうか。

農産物が直接対面販売されてい

たところ、消費者は生の情報を手に入れることが出来ました。「大きさが不揃いでも安全で美味しい」「土付きの方が鮮度がいい」といったこと、あるいはその農産物にふさわしい調理方法を直接聞き、生産者の苦勞を農産物と一緒に買ってくださることが出来ました。

ところが今、スーパーで売っている農産物は工業製品と同じ扱いを受けています。でも消費者は工業製品を選ぶほどには農産物の勉強をしません。知らないことについては無責任な不平不満やわがままを言いやすいものです。それをすべて消費者ニーズという言葉に翻訳されるのも困りものです。

通訳者が通訳の役割を果たさないのであれば、生産者と消費者は昔のように直接話をするべきでしょう。消費者ニーズがあるなら、生産者ニーズがあつて当然です。生産者は消費者に対してもっと教育をすべきだと思います。教育をする側に立てば自ずと勉強をしなければならぬし、一生懸命にならざるをえなくなると思います。

多くの地場密着型の就農者の方は、その土地で生まれ、その土地で育ち、世代交代をしていきま

す。自己完結型で閉鎖的な人間社会が形成されていくのは当然といえます。これからは「よそ者」をマイナスイメージではなく、プラスイメージで受け入れていける地域が生き残っていきけるのではないのでしょうか。

座談会で一緒にさせていただいた就農者の方たちは頼もしいかぎりだと思えます。自分のやっていける仕事を楽しめて仕方がないと言っている人が都市生活者のなかにいるのでしょうか。こういう方たちが将来の農業の牽引力になっていくのだと思います。

「離農は簡単でも就農は難しい」というのが日本農業の現状でしょう。しかし、離農する人が多くなったなら、その分農業をやりたいと思っている人に農業をさせやすい体制や法律を作るべきです。どうやったら普通のサラリーマン世代が農家になれるか」ということを知っている人は少ないでしょう。分かったからといってすぐに農業を始める人はいないかも知れませんが、農業に対する関心は高まるのではないのでしょうか。

消費者と生産者の交流が盛んになってきたとはいえ、まだまだ心

理的にも物理的にも距離があります。ぎるように思います。

松井 歩

「女性の時代」と言われ、とにかく元気な女性たちが注目される時代になった。もはや「女性の社会進出」は当たり前のことになり、「女性の地位の向上」などという言葉自体、もしかしたら、時代遅れなんじゃないか—と感ずるようになってしまった。

でも、本当にそうなのだろうか。最近、この「女性の時代」にある種の「うそくささ」を感じる。確かに、さまざまな職場に女性の姿が増え、男性より目立つ仕事をしている場合も多い。商品開発のターゲットは女性であり、選挙になれば、女性票の取り込みが当落の決定に大きく影響する。しかし、本当に女性の地位が向上したのだろうか。肝心の政策決定の場での、あの男性集団を見ていると、もしかして、女性はおしゃか様の手の上で、右往左往しているだけの孫吾空に過ぎないのではないかと懐疑的な気分になる。

今、「女性の生活情報紙」をキヤッチフレーズにしているフリー

ペーパーの編集に関わっているが、「なぜ、今、女性なのか」を常に自問自答している。女性誌のはんらんぶりはすさまじく、しかも、女性誌の内容はどれも、似たようなものばかり。

「ようやく、女性誌が女性に追い付いた」。こんなコピーで売り出した女性誌もあったが、それなら、女性は「ちょっと遅れた雑誌」から、「最新情報」を得ていたのか—と、情けなくなってしまう。

女性誌をはじめ、現在の女性ブーム全般が、ちょっとだけ時代感覚に勝れた男性側の、「これから女性のこうなるんじゃないか」という発想によって作りだされたものなのではないか。今回の座談会に出席して、なぜか、こんなことを考えてしまった。

農業の明日を考える時に、女性の視点は欠かせないと思う。特に、後継者不足に悩む農村が多い中では、女性の存在は不可欠だ。農村では、女性も重要な働き手であり知り合いの農家の主婦は「専業主婦って楽しそうだからいいな」と、いつもため息をついている。

子供を育てながら職場と家を行き回っている私の周囲の女性たち

に比べると、「職住接近。しかも、物を作り出すというすばらしい仕事をしているんだから、せいたくな悩み」と言ってきたのだが、決してそうではないことがよく分かった。

これからの農村や農業は、女性だけで作るものでもないし、まして、男性だけが考えるものでもない。農産物自由化の波を受けて、世界的規模で農業の在り方を考えなければならぬ時代だからこそ、農村や農業自体からこれまでの古い体質を見直す絶好の機会ではないだろうか。

今は、女性の時代などと浮かれてはられないのだ。男性も含めて社会の在り方から生き方までを真剣に考えなければならぬ時代だと思う。少なくとも、これまで、体制決定の場から遠ざけられていた女性だからこそ、今までの間違いも指摘することができるはずだ。そのために、女性自身が母親や祖母たちが歩んできた道のりを、しっかりと見据え、自分の目で見たいこと、考えたことを声に出せるようにしなければ—。